特集・江戸／東京によせて

江戸・東京

地域文化研究会会長
文部省視学官
佐藤　照雄

都市の形成

東京都は、現在の首都である。その前身が江戸であるが、それができたのは三百五十～六十年ほど前に過ぎない。それまでは全くの一寒村であった。つまり、それ以前の伝統がないところに、政治的な力によって、人為的、計画的に都市をつくりあげていったということである。江戸城の築城と、それを核とした都市づくりが〝急速〟に進められたのである。

したがって、江戸は新開地、新興都市ということができる。武士も町人も各国から流入してきたものであるし、風俗、慣習、言葉なども、初めは混然として各国のものが並存していたのである。

江戸が事実上の首都となったことは、東日本に重心が移ったということになる。江戸の前には、一時期、鎌倉が政治中心地になったことがあるが、日本の歴史を通して、政治・経済の中心はほぼ畿内以西にあったのである。この意味で、江戸から東京へと続く約三百五十年の首都は、関東と、さらに広くは東日本の政治・経済・文化の発展・躍進のうえではかり知れない影響をもったといえる。五街道をはじめとする江戸を基点とする道路網の整備、東回り海運の発達などは、関係地域の産業興隆の基盤を形成する役割をも果たしたのである。

江戸は、江戸城中心の城下町であり、基本的には政治都市としての性格を強くもっていた。しかし、江戸が大都市に発展するにつれ、江戸市内の各地域には、それぞれ特色ある独自の性格をもつ町ができていった。町人町、現在の下町と総称される地域がそれである。山手（やまのて）と下町と対比されるその性格の相違も、もとを辿れば武家町と町人町という由来にいきつくのである。

江戸の町は、幕府草創期以来、時代の経過とともに規模を大きくしていったが、特に明暦の大火後の復興によって一段と発展した。江戸八百八町といわれるように多くの町ができ、当時、世界最大の人口を擁する都市となっていた。東京になってからは、関東大震災と、第二次世界大戦時の空襲によって市街のほとんどが焼失し、その後の都市づくりによって今日の東京の繁栄がもたらされている。

現在、東京というと、行政的には二十三区だけでなく、多摩地区とそれに加えて伊豆諸島から小笠原諸島までがはいる。生活感覚から言っても、多摩地区までは一体的である。それはともかく、東京は第二次大戦後の三十数年において、都市の外観、地域的広がり、一千二百万の人口など、その発展と変容の著しさには驚くほどのものがある。東京在住のものにはふるさとであり、他の地域の人たちにとっても首都として関係がある。東京を一つの巨大都市として、これからの生活舞台という観点からどのような問題があるかを見ていくことは、日本における都市問題の検討と今後の方向を探る意味で、大いに意義があることと思う。

人々の生活

江戸は、京都、大阪、奈良など、あるいは古くからの門前町、市場町、港町などに比べれば新興の都市である。したがっ

て、伝統よりも新興の気風があった。それに、将軍のお膝元だという誇りももっていた。江戸っ子といわれた気質や気性にはそれらが反映している。

商人たちは、伊勢屋、近江屋、越後屋などの名に見られるように諸国から集まっていた。また、武士たちも同様である。江戸の藩邸には、それぞれの藩の有能な武士たちが詰めていた。彼らは、江戸と藩を結ぶ情報伝達者であるとともに、藩を超えての交流を行うことによって相互の情報を交換し合うという役割をも担っていた。そして、この交流は、さらには、藩という閉鎖的な壁を破った開放的な人間集団、サロンを形成し、新しい学問や政治活動の母胎となっていったのである。かの有名な「解体新書」訳出の蘭学者グループである小浜藩の杉田玄白と中川淳庵、九州の中津藩の前野良沢、幕府仕官の医師桂川甫周など、さらにはその周囲にある四国高松藩の軽輩平賀源内、秋田藩の小田野直武、奥州一関藩の大槻玄沢などと広がる相互の交友関係をみていくと、江戸を舞台にしての学問研究が、一藩を超え、身分を超えた人間関係の中で進められていたことがよく分かるのである。

江戸の町人――商人や職人たちは、年中行事や祭りなど、それぞれの町を単位として大いに意気をあげた。

江戸は新開地であり、特に当初は江戸にはいってきた働き手は男が圧倒的に多かった。女ひでりの町である。これが吉原をはじめ遊郭を繁盛させ、遊女たちに惚れさせる洗練された趣味と金離れのよい気っぷとを第一とする江戸っ子気質を生み出したと見ることができる。

江戸町人が、江戸の生活の中から、新しい文字、芸術を生み出していることにも注目しなければならない。洒落本、滑稽本、人情本といわれるものは、町人の生活と遊びを描き、狂歌や川柳は風刺の中に庶民の感覚や意識を表している。また、印刷術の発達もあって浮世絵版画が多く出回ったのも町人文化の興隆を示すものであった。

東京の将来――都市の伝統と革新

東京は今や世界第一の巨大な都市となっている。市街地の周辺への拡大、多数の衛星都市の誕生といった面と、高層ビルの林立に表されている都市内部の再開発といった面が同時に進行している。

ここで考えなければならないのは、大きいだけが能ではないということである。

地方の三十万都市に生活の快適さでは一歩を譲るというのであれば、首都としての面目が立たないといえるだろう。生産本位、仕事本位の都市機能ではなく、文化的環境、健康維持の自然的環境の整備拡充にもっと力を入れていくべきであろう。人間生活における「豊かさ」の内容を、我々は考え直すべき時期にきていると思う。

江戸から東京へと続く歴史の中で、パリ、ロンドン、ニューヨークなど世界の主要都市が経験したもので東京にはないものは、市民革命だといわれている。したがって、それ故に、都市の構成員の中に、市民としての団結の意識と自治意識が、これらの都市ほどには未だに成熟していないというのが現状である。東京に在住する者が、東京をふるさととして愛し、よりよくしていく気風が生まれてくることが、これに対処する第一の要件である。現在、東京は、外形は巨大化し現代的な都市として変貌を続けているが、そこに住む人間は、東京への定着の度合いが高まり、そして東京の各地域ごとに、その伝統を継続する動きも出てきている。

都市の性格は、その外観によるものではなく、都市を機能させる人間集団――市民の生き方に関わっているといえる。東京人が、江戸以来三百五十年の伝統のうえに立って、新たに何を創造し得るかが、首都として、都市としての東京の将来像を決める最大の要因となると思う。